

平成19年 9月3日	農作物病虫害発生予報 9月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	9
III	病虫害・農薬情報	
	病虫害メモ — オオムギ縞萎縮病の発生生態	10
	ハモグリバエ類の防除法	10
IV	参考(予報の見方、気象予報、9月のテレホンサービスの内容)	11

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(穂いもち)	やや少	やや少	前年並
	紋枯病	平年並	やや少	前年並
	トビイロウンカ	多	多	多
	コブノメイガ	多	多	多
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多	前年並
ダイズ	ハスモンヨトウ	平年並	やや少	少
	吸実性カメムシ類	平年並	平年並	少
カンキツ	かいよう病	やや多	平年並	少
	黒点病	やや多	平年並	少
	ミカンハダニ	平年並	平年並	少
果樹全般	カメムシ類(チャバ 初カメシ、クサギカメシ、ツアカメシ)	やや少	やや少	少
野菜全般	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	多

注) 野菜全般のハスモンヨトウは、フェロモントラップの誘殺数により評価した。

作物	担当者	お問い合わせ先 TEL (083) 927-4006 FAX (083) 927-4071
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)	
果 樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)	
野 菜	岡田(病害) 畑中(虫害)	
茶	畑中(病虫害)	

II 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	粉剤・液剤：穂ばらみ後期と穂揃期の2回

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬の巡回調査では、葉いもちの発生ほ場率は15.1%（平年32.3%）、発病株率は3.9%（平年11.1%）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 8月下旬の巡回調査では、穂いもちの発生ほ場率は11.4%（平年21.8%）、発病穂率0.1%（0.4%）で平年に比べやや少なかった（－）。

<防除のポイント>

8月下旬に出穂したほ場では、出穂期以降の天候がぐずついでおり穂いもちの発生が懸念されるため出穂後の防除を実施する。

2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	前年並	－

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は25.6%（平年40.0%）、発病株率は3.5%（平年6.8%）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では、9月の気温は高い（＋）。

(3) 防除対策

<防除判断>

出穂期後2週間を過ぎた薬剤散布は経済的効果が劣る。

3 トビイロウンカ

8月16日付け平成19年度農作物病害虫発生予察警報第1号を参照。

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	9月5日頃まで（第2世代幼虫最盛期） 9月24日頃以降（第3世代幼虫最盛期）

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は64.0%(平年17.7%)、10株当たり虫数は47.0頭(平年3.0頭)、10株当たり短翅成虫数1.5頭(平年0.2頭)で平年に比べ多かった(+)

イ 8月下旬の巡回調査では、中生品種等を作付けしたほ場で防除の目安(5頭/株)を超えるほ場は17.8%と多かった(+)

ウ 気象予報では、9月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

ほ場をよく観察し、多発生が確認された場合は直ちに防除を実施する。その場合、使用する農薬の収穫前日数を確認する。

<防除のポイント>

ア 警報第1号発令後、気温が平年に比べ高かったため、3~4日防除適期が早まっている。このため、防除時期が遅れないように注意する。

イ ほ場での発生状況を確認し、残効性に優れる薬剤により防除を的確に行う。

ウ 薬剤が株元にかかるように、丁寧に散布する。

エ 収穫期が迫り薬剤散布ができないほ場は早めに収穫する。

オ 必要以上に早い落水は、坪枯れの発生を助長するので、適期落水に努める。

JPP-NET病害虫発生予測システム

飛来日	9月					10月				
	5	10	15	20	25	1	5	10	15	20
トビイロウンカ	●●	-----	-----	○○○○○○○○	○○○○○○○○	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●
○ 6月25日	●●	-----	-----	○○○○○○○○	○○○○○○○○	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●
○ 7月2日	●●●●●●●●	-----	-----	-----	-----	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●
☆◎ 7月4日	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	-----	-----	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●
☆◎ 7月6日	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	-----	-----	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●
○ 7月10日	●●●●●●●●	○○○●●●●●	●●●●●●●●	-----	-----	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●

予測日 2007年 8月 30日
 凡例 A: 成虫 - : 卵 ○ : 幼虫 @ : 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 トビイロウンカの防除適期予測図

4 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	次の成虫最盛期にはほとんどのほ場で出穂をしているため、コブノメイガ対象の防除は必要ない。 (防除適期予測図参照)

(2) 予報の根拠

8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は88.4%(平成58.5%)、被害株率は45.8%(平成19.6%)、被害葉率は4.9%(平成1.6%)で平年に比べ多かった(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

出穂後のイネには産卵が少なく、次の成虫最盛期にはほとんどのほ場で出穂をしているため、コブノメイガ対象の防除は必要ない。

JPP-NET病害虫発生予測システム

		9月					
飛来日		1	5	10	15	20	25
コブノメイガ							
○	6月30日	A A A A					
☆◎	7月3日	+ + + A A A A					
☆◎	7月4日	+ + + + A A A A					
☆◎	7月5日	+ + + + + A A A A					
○	7月10日	o + + + + + + + + A A A A					

予測日 2007年 8月 30日

凡例 A: 成虫 - : 卵 o: 幼虫 + : 蛹 @: 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 コブノメイガの防除適期予測図

5 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多 (8月下旬以降に出穂したほ場)	やや多	前年並	・穂揃期に防除を実施する。 ・穂揃期防除後にほ場の状況を確認し、斑点米カメムシ類を確認した場合は、その7日後に再度防除を実施する。

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査(出穂したほ場を対象)では、発生ほ場率は34.5%(平成29.6%)、20回すくい取り虫数は0.9頭(平成0.5頭)で平年に比べやや多かった。種類別ではアカスジカスミカメが平年に比べ多く、クモヘリカメムシは平年に比べやや多かった(+)

イ 7月6半旬~8月5半旬までの予察灯誘殺数(県内4か所)は、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシともに平年に比べやや多かった(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除>

斑点米カメムシ類の本田への移動を助長するので出穂したイネ科雑草の草刈りは避ける。

<防除のポイント>

- ア 防除は出穂後 3 週間以内に行う。
- イ 防除時期に畦畔に出穂したイネ科雑草（エノコログサ、ヒエ、メヒシバ等）がある場合は、畦畔も含めて防除を実施する。
- ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、広域で一斉防除すると効果が高い。
- エ 薬剤散布後もほ場でカメムシが見られる場合は、追加防除を実施する。ただし、収穫前日数に特に注意する。

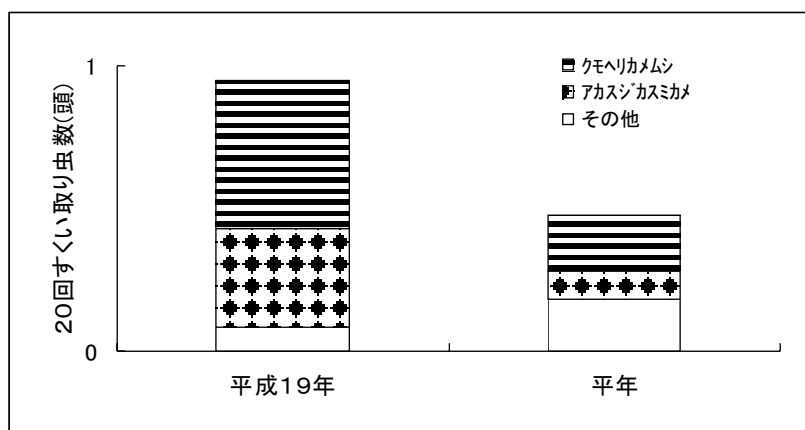


図 出穂したほ場を対象とした20回すくいとり調査

ダイズ

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	少	9月1日～5日の若齢幼虫最盛期（防除適期予測図参照）

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は23.8%（平年36.4%）、1a当たり白変葉か所数は0.2か所（平年0.9か所）、25株当たり虫数は0.3頭（平年5.7頭）で平年に比べやや少なかった（-）。
- イ 県内のフェロモントラップにおける7月5半旬～8月4半旬の誘殺数は、平年並みであった（±）。
- ウ 気象予報では、9月の気温は高く、降水量は多い（+～±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

防除の目安は、白変葉か所数が1アール当たり5か所以上である。

<防除のポイント>

薬剤は同一系統の連用を避ける。

飛来日	9月					10月					
	1	5	10	15	20	25	1	5	10	15	20
ハスモンヨトウ											
○ 7月5日	o	o	o	o	o	o	+	+	+	+	+
○ 7月18日	@	@	@	@	o	o	o	o	o	o	o

予測日 2007年 8月 30日
 凡例 A: 成虫 -: 卵 o: 幼虫 +: 蛹 @: 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 ハスモンヨトウの防除適期予測図

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	莢伸長最盛期（開花期後30日頃）と、子実肥大完成期（開花期後45～50日頃）の防除を実施する。

(2) 予報の根拠

8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は52.4%（平年38.9%）、1㎡当たり虫数0.2頭（平年0.2頭）で平年並みであった（±）。

優占種は、ホソヘリカメムシ及びアオクサカメムシであった。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 防除の際はダイズの莢に薬剤が充分かかるよう散布する。

イ 8月までは低密度でも、9月以降密度が急増することが多いため、ほ場での発生状況を確認する。

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	少	台風の前

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は36.4%（平年21.8%）、発病率は2.1%（平年4.2%）、発病度0.5（平年1.4）で、平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、9月の降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

すでに発病しているほ場やあまなつ、いよかん等発病しやすい品種では、台風の前には防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 温州みかんなどかいよう病に比較的強い品種でも多発することがある。特に発病しやすい品種との混植園や近くに発生園がある場合には発生状況に注意する。

ウ 防風樹や防風ネットを整備し、強風により枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。

エ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を防ぐため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。なお、ICボルドー66Dを高温期に使用すると薬害を生じやすいので、9月までは使用を避ける。

オ ミカンハモグリガ（エカキムシ）の被害は本病の発生を助長するので、防除を徹底する。とくに隔年交互結実園の遊休樹や幼木では注意する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	少	前回の防除後、累積降水量が200～250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は100%（平年99.1%）、発病果率は58.0%（平年63.7%）、発病度12.9（平年13.0）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、9月の降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本であるので、前回の防除後、累積降水量が200～250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき防除を実施する。

<防除のポイント>

樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	防除の目安を超えたとき 寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.9%（平年24.5%）、寄生葉率2.2%（平年2.7%）で平年並みであった（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

防除の目安は、寄生葉率が30～40%、または雌成虫密度が1葉当たり0.5～1頭である。

<防除のポイント>

現在、1ほ場当たりの寄生葉率は低いですが、発生ほ場率は高いので、ミカンハダニの見えないほ場でもこまめにほ場を見回り、多発させないように注意する。

果樹全般

1 カメムシ類（チャハコカメムシ、クキカメムシ、ツアカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	園地への飛来を確認した時

注）現況は予察灯とフェロモントラップ調査による。

(2) 予報の根拠

ア 予察灯の誘殺数（県内5か所、8月1半旬～8月5半旬合計）は、254頭（平年529頭）でやや少なかった（-）。

イ 主な餌となるヒノキ、スギの球果量は、1月～4月の花粉飛散量から平年並みと推測された（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

例年被害が発生する園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

<防除判断>

被害を受けることの多い園では、園内の発生状況や周辺の灯火を観察し、飛来がある場合は防除する。

<防除のポイント>

カメムシ類に対する飛来時以外の薬剤散布は効果がないだけでなく、ハダニやカイガラムシの多発を招く場合があるため、スケジュール散布はしない。

野菜全般

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	若齢幼虫期

(2) 予報の根拠

ア 県内のフェロモントラップ（4か所）における7月5半旬～8月4半旬の誘殺数は平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、9月の気温は高く、降水量は多い（±～+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

野菜の定植時期は異なっているため、ほ場での発生状況を確認する。

<防除のポイント>

ア 卵塊や若齢幼虫が集団で食害している葉を探し、捕殺する。

イ イチゴ等の施設栽培では、葉の裏や鉄骨パイプ等に産卵することが多いので、黄褐色の毛に覆われた卵塊を見つけたら直ちに捕殺する。

ウ 若齢幼虫の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

【その他の病害虫】

作物名	病虫害名	予 想 発 生 量	現 況		発生ほ場率		備 考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	ツマグロ ヨコバイ	平年並	平年並	前年並	27.9	23.7	近年、出穂期以降多発生するほ場があるため、発生が多い場合は収穫前使用日数など農薬使用基準を遵守して防除を実施する。
野菜全般	アブラムシ類	やや少	やや少	少	—	—	山口市の黄色水盤による8月の誘殺数は平年に比べやや少なかった。
	シロイチ モジヨトウ	平年並	平年並	多	—	—	山口市のフェロモントラップによる8月の誘殺数は平年並みであった。
	オオタバ コガ	やや少	やや少	少	—	—	山口市のフェロモントラップによる8月の誘殺数は平年に比べやや少なかった。

Ⅲ 病害虫・農薬情報

病害虫メモ

オオムギ縞萎縮病の発生生態

オオムギ縞萎縮病は、土壌中にあるウイルスによって生じる土壌病害で、オオムギだけに発生します。発病すると、葉に黄緑色の細長いかすり状の斑点やモザイク症状が現れ、激しい場合には、生育が悪くなり、収量や品質が低下します。

本病の病原ウイルスは、全国的に分布しているオオムギ縞萎縮ウイルス (BaYMV) と、一部の地域のみ分布しているオオムギマイルドモザイクウイルス (BaMMV) の2種類です。現在、山口県では、BaYMVに抵抗性のアサカゴールドが多く栽培されていますが、両ウイルスの発生が確認されているため、アサカゴールドに前述のような症状がでたら、BaMMVに感染している可能性も考えられます。

これらのウイルスは、いずれもポリミキサ菌という「かび」とともに土壌中にいて、オオムギが播種されるとウイルスに保毒したポリミキサ菌が根に侵入し、ウイルスを伝搬します。一旦ウイルスがほ場に侵入すると、ポリミキサ菌とともに何年間も土壌中に残り、次作以降本病の伝染源となります。そして発病したオオムギの根で増殖したポリミキサ菌とウイルスは、何年間も土壌中に残り、本病の伝染源となります。

そのため、本病はオオムギに発生する病害虫のなかでは防除が困難なもののひとつで、農業機械や農機具、長靴等の使用後はしっかりと洗浄するなどして、ほ場に汚染土壌を持ち込まないように注意することが最も重要です。(専門研究員 村本和之)

ハモグリバエ類の防除法

ハモグリバエ類は小さなハエです。いろいろな作物に被害を及ぼし、幼虫は葉の中にもぐってトンネル状に食害するためエカキムシとも呼ばれています。葉に白っぽい筋模様がつき、野菜や花では品質を低下させ、多発した場合は葉が枯死することもあります。

種類は、マメハモグリバエ、トマトハモグリバエ、アシグロハモグリバエなどがあります。それぞれ成虫、幼虫とも似ているため、肉眼での区別は困難です。

多発生すると防除が難しくなるので、次の対策を実施します。

①定植時

- ・ハモグリバエ類の食害痕がある苗は植えない。
- ・粒剤施用を行う。
- ・防虫網(目合0.6mmで効果が高い)を設置し、侵入を

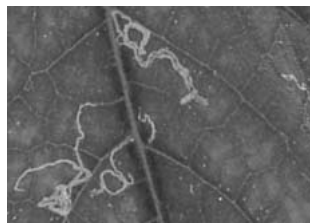


写真 キュウリの被害

②生育期(薬剤防除)

- ・発生初期から防除する。
- ・効果の高い薬剤を使用する(指導機関から情報を入手する)。
- ・抵抗性対策として、同一薬剤の連用は避ける。

③収穫後

- ・夏期では、施設を密閉して蒸し込む。
- ・冬期では、施設の被覆資材を取り除いて寒さにさらす。

これらの対策のほか、ハモグリバエ類は黄色に集まる性質がありますので、黄色の粘着シートをつり下げるのも一つの方法です。(専門研究員 畑中 猛)

IV 参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

(注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる)

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（8月31日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い(%) 少ない	平年並(%)	高 い(%) 多い
気 温	20	30	50
降 水 量	30	30	40
日照時間	40	30	30

週ごとの気温傾向

予 報	低 い(%)	平年並(%)	高 い(%)
1 週 目	20	40	40
2 週 目	20	40	40
3～4 週目	20	30	50

3 9月のテレホンサービスの内容（予定） TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	9月の発生予報、イネ病害虫の防除、ダイズの害虫の防除、野菜病害虫の発生状況と防除
中旬	果樹類害虫の防除、イネ病害虫の防除、イチゴ定植期前後の管理、ダイズ、野菜全般のハスモンヨトウの防除
下旬	野菜病害虫の発生状況と防除、果樹カメムシ類の防除、トマト黄化葉巻病・黄化えそ病対策